

令和2年度訪問型家庭教育支援推進事業 第3回専門講座

1. 日時 令和3年2月16日（火） 13時30分～16時00分
2. 場所 九度山町中央公民館 大会議室
3. 参加者 家庭教育支援員、福祉担当課職員、母子保健推進委員、保健師、主任児童委員、教育委員会職員（家庭教育担当、社会教育担当、指導主事等）、和歌山県立医科大学保健看護部学生

合計39名

4. 内容

13:35～ 行政説明

◆「和歌山県における訪問型家庭教育支援体制の構築に向けて」

和歌山県教育庁生涯学習課 社会教育主事 松尾 綾

○「家庭教育支援」を始めよう（The dawn of a new era）

①今の家庭を取り巻く現状

- ・約4割の保護者が子育てに悩みや不安を抱えている。
- ・地域における子供を通じた付き合いが減少している。
⇒孤立しがちな家庭、支援が届きにくい家庭への支援が必要。

②家庭教育支援とは？

- ・家庭教育は、すべての教育の出発点。
⇒妊娠期、子育て期、学齢期まで切れ目なく続く親子の育ちを支援。

③家庭教育支援チームとは？

- ・訪問型家庭教育支援
- ・子育てに関する情報提供、学習機会の提供、親子参加型の行事など

④家庭教育支援チーム結成に向けて

- ・行政主導による組織づくりのスケジュール化
- ・家庭教育に関する事業整理
- ・現場で起こっている事象の把握
- ・チーム内で「ぶれない」共通認識



⑤訪問型家庭教育支援の類型例

- I. ユニバーサル型…すべての家庭を訪問
- II. ベルト型…対象年齢を限定して、すべての家庭を訪問
- III. エリア型…地域ごとに、すべての家庭を訪問
- IV. ターゲット型…訪問希望家庭や不登校、非行など課題のある家庭を訪問

◆講演①「学校現場の速報 ～コロナ禍の実態～」

和歌山県教育庁教育支援課 教育相談主事 浦神 千幸 氏

○概要

①学校現場は今

- ・対人関係の悩み
⇒不登校、いじめ微増
- ・学年が上がるにつれ、いじめは表面化しづらくなる傾向がある
⇒一定数の児童・生徒は誰にも相談しない・できない
- ・自分自身や取り巻く世界に対する恐怖や不信感 ⇒ **不安な感情を強める**

↑
現実適応を難しくする

まずは**安全の保障**

②相談から見えてくるもの

- ・不安な気持ちを背景にした行動 ⇒ 学校への行き渋り
- ・スマホやタブレットの生活上での位置づけ
⇒ 自粛期間において一層役立つものと認識される
- ・人間関係において“違い”が気になる
⇒ 攻撃対象となることもある

③傾聴のポイント

- ・聞いてほしい思いを聞く！
- ・事実関係を掘り下げない！
- ・背景や気持ちを受け入れる！

④コロナの3つの感染症

病気→不安→差別

⑤支援者を支えるもの

- ・思い
- ・知恵
- ・情報
- ・つながり
- ・サポートされる体験



◆講演②「地域でつくる家庭教育支援チーム」

湯浅町家庭教育支援チーム 「とらいあんぐる」代表 上田 さとみ 氏

○概要

①湯浅町の状況

町立保育所3所、私立幼稚園1園、私立保育園1園
子育て支援センター 1ヶ所（町立保育所内）
小学校4校、中学校1校

②課題

以前：生徒指導上の問題行動
⇒ 近年：家庭環境・養育の問題
地域社会の希薄化により、孤立化していく家庭
⇒ ・困っている状況がわからない
・自分から支援を求められない
学校と家庭の連携強化



全戸訪問へ

③支援体制の構築

平成20年 スクールソーシャルワーカー活用事業
平成21年 訪問型家庭教育相談体制充実事業
「とらいあんぐる」立ち上げ、SSWがチームリーダーになる
全戸訪問（**小中学校の児童生徒**）
平成27年 利用者支援事業
教育と福祉（医療・介護・保健）との連携強化
全戸訪問（**0歳児から義務教育終了まで**）
平成30年 子育て世代包括支援センター

④家庭教育支援チームの構成

○リーダー
○事務職員
○アドバイザー
○訪問支援員…元教員、元保育士、民生児童委員、母子保健推進員、栄養士、地域住民、読み聞かせボランティア

支援員は地域にいます！

多ければ多いほど、地域のアンテナは高くなります！

⑤事業内容

- ・全戸家庭訪問（情報誌配布、つながりづくり、相談対応）
- ・講座の開催（地域で、学校で、子育て中の保護者へ）
- ・訪問支援の約束事

◆事例発表「家庭教育支援チーム立ち上げ時とスタートについて」

古座川町教育委員会 教育課 主事 住吉 友樹 氏

○概要

①古座川町について

町立保育所2所、小学校3校

②家庭教育支援チームについて

名称「さくらファイブ」

○家庭教育支援コーディネーター

○家庭教育支援員（5名）

○指導主事（学校教育）

○事務担当者（社会教育）



③チーム立ち上げまでに

・各種関係機関との連携強化

・先進地視察で那智勝浦町を訪問 ⇒ スタート後に交流会も企画

④チームのスタートまでに

・月1回のチーム会議を実施

・会議と合わせて、研修会も実施（県教育委員会、太地町による支援）



2/20から訪問支援スタートへ

5. アンケート（回収17名）

①立場内訳

社会教育関係職員 5名

福祉関係職員 2名

家庭教育支援関係者 4名

保健師 3名

民生・児童委員 1名

その他（指導主事、母子保健推進委員）2名

②専門講座受講の動機や目的

・事業実施に向けて

・訪問型家庭教育支援チームの立ち上げ、事務について聞きたかった。

・次年度、実施予定のため

・家庭教育支援の専門知識を得るため。また、他自治体等の動きを知るため。

・家庭教育支援サポートチームの方針・訪問等の取組を知り、自らの訪問へ役立てたいと考え、参加した。

・他の活動状況を知り、自身の今後の活動に生かせればと思った。

・自町で今後このような活動を進めていきたいと思ったため。

・今後、家庭教育支援に取り組むための勉強として。

- ・子育て支援会議で当講座が開催される事を聞き、今後の活動の参考になると思い参加。
- ・教育と保健・福祉の連携について勉強したかった。

③今後の活動の中でどの程度参考になりますか。

とても参考になった 13名
 参考になった 4名
 あまり参考にならなかった 0名
 全く参考にならなかった 0名

- ・家庭教育支援の必要性や実情など参考になった。
- ・実施している町の事例が非常に参考になった。
- ・具体的な事例や流れが分かった。
- ・コロナ禍における学校現場の変化がよく分かった。
- ・支援を行っていくうえで聞きたかったことを聞くことができ、非常に充実した時間になった。
- ・訪問事業のことがイメージできた。
- ・5歳児健診を実施されていることを初めて知った。就学前の健診では時間的に難しい所も1年前に行われることで、子供も保護者も時間をかけて対応することができる。
- ・いじめや不登校について、いつもたくさんの気づきがあり、とても勉強になった。また、ぜひ講演を聞く機会がほしい。
- ・まだ何も無い状態なので、取り組んでいくにあたっての考え方や方法等、具体的ケースも聞いて参考になった。
- ・子育て中の保護者は、悩みが深刻になるほど、どんなところに相談したらよいか不安になることもあると思うが、3か月に1回でも訪問してくれ、話を聞いてくれる人がいることは、安心につながる。傾聴し、寄り添える支援員になる努力をする。
- ・保健、福祉の中にいると教育（学校）との連携、つながりが難しいと感じるので、それぞれの立場の者が同じテーブルについて話し合えることが理想的。

④訪問型家庭教育支援について、課題や期待、望むこと等

- ・支援の担い手の後継者を見つけることが難しい。
- ・訪問時に、電気がついていたり、声が聞こえていたりしているにもかかわらず出てきてくれない家庭もあり、時にはどうすればいいのか迷いが生じる。微力ながら、寄り添えたらと思いつつ活動している。
- ・保護者が忙しくなり、チーム員の支援が届きにくくなっている。どのようにアプローチするかが大きな課題。
- ・とらいあぐるのような全戸訪問は難しくても、うちに合った支援を考えて実践していく必要があるのかなと感じた。
- ・民生委員、保健師、スクールソーシャルワーカー、家児相談員等、家庭訪問のあり方、連携の仕方。行政関係箇所との対応。
- ・今後も県内の先進地域の取組を情報提供してほしい。
- ・今後、全地域で支援が広がり、地域で悩む保護者、学校の助けになることを期待する。その構築に向けて、可能な範囲で県教委や先進市町と連携したい。
- ・問題を抱える家庭が、相談しやすい環境作り、継続が必要。
- ・切れ目のない子育て支援が、すごく大切である。和歌山県すべての市町村、そして全国に広がってほしい。

⑤その他

- ・上田先生の話を変えて聞き、新しい気づきがあり、とてもいい研修だった。